

ハロウィン
超短編まつり 2010



まえがき

以下は2010年、10月。はてなハイク (<http://h.hatena.ne.jp/>) で行われた、とある短編競作際の記録である。具体的には以下のページを参照せよ。

- ・ ハロウィン超短編まつり (>w<) 2010

—[http://h.hatena.ne.jp/keyword/ハロウィン超短編まつり \(>w<\) 2010](http://h.hatena.ne.jp/keyword/ハロウィン超短編まつり(>w<)2010)

- ・ (>w<) ハロウィン超短編まつり・ホントにやるかもしれない・準備会場

—[http://h.hatena.ne.jp/keyword/ \(>w<\) ハロウィン超短編まつり・ホントにやるかもしれない・準備会場](http://h.hatena.ne.jp/keyword/(>w<)ハロウィン超短編まつり・ホントにやるかもしれない・準備会場)

薄手のちょうちん紙とは言わない。普通の障子紙でよかったんだ。
なのにそんな障子紙さえうちの近所じゃ見つからないときた。やっと見つけた習字用の半紙がひと束。足りるかな。
竹ひごは諦めた。どこにもない。隣町のホームセンターなら、と思って電話をかけてみたけど、竹ひごって何ですか、と返されるとは思いもしなかった。わかったよ。プラスチックの棒でやるよ。
午後六時。とにかくもう時間がない。
甥っ子との約束を破るわけには。

使いなれてるはずのタミヤのプラ棒がこんなに厄介なものだったなんて。
熱を加えりゃ曲がるのは竹ひごと同じ、いやもっと自由自在のはずだった。確かに曲る。でも曲げたプラ棒は曲げたとおりの形にしかならず、竹ひごみたいな「返り」がない。「返り」がないものを骨組みにしたって、上から貼る紙がぴんとなるはずがない。ちょっと考えたらわかっただろうに。
まもなく午後八時。
大丈夫。まだ時間はある。

駄目だ。全然うまくいかない。
弓状に曲げてった骨組みに紙貼ってきゃカボチャのマスクなんてちょろいぜ。確かにそう言った。
甥っ子は大喜びだった。いつも作ってやる模型を見て目を輝かせてる甥っ子が、そう聞いて頭の中でどんだけ見事なカボチャマスクを想像したか。少なくとも、こんなに歪んであちこち破れかかったマスクは想像しなかったはずだ。
午後十時。
やるしかない。

禁煙を破った。もうひと箱なくなりかけてる。
粘土をこねている。カボチャマスクはもうどうしようもない。せめて甥っ子の心を奪うようなちっちゃなジャック・オー・ランターンを、得意の粘土で仕上げなければ。
午前零時をまわった。
得意の粘土なんだ。開き直って、凝りに凝ってやる。

ちくしょう！コーヒー飲んだはずなのに！
まだ半分しか形もできてないのに当日の午前四時って！

気がつくとも夕食の時間だった。
朝九時ごろだったか、うつらうつらしながら階下へ降りて、食卓の上にポンと置いたジャック・オー・ランターンはなくなっていた。聞けば、甥っ子が持って帰ったという。
喜んでくれたかな、あの人形、と母に尋ねてみた。
母はどうかしらね、はいお手紙、と言って、甥っ子からの手紙を差し出した。

手紙にはただひとこと、「いっしょにあそぶってゆったのに！」と書いてあった。
(了)

『かすかにカフカの』

まさか彼女が毎週金曜日になるとカボチャに変身してしまうなんて、出会ったときは想像もしなかった。

ふたりで迎えた初めての朝。目が覚めると、となりでバスケットボールほどのカボチャが寝息をたてていた。

この状況におかれた誰もがそう思うと思うが、私はまず、これは夢だろうと思った。夢でないとなると、彼女の悪戯だろうと思った。そういえば来週はハロウィンである。

「ごめんなさい、いつか打ち明けなければとは思っていたのだけれど」
声にあわせてオレンジ色の身体が揺れた。間違いなく彼女の声だった。

「うちの家系って、ちょっと変わっているのよ」

「ご先祖さまがカボチャを邪険に扱った呪いとか、そういうものなの？」

私の声はかすれ、かすかに震えていた。

「いいえ、純粹に体質的なものみたい。父方の遺伝でね。父は土曜日だけバラライカになるし、弟なんて火曜日に便座カバーになっちゃうわ」

なるほど、と私は言った。寝起きのせいかな、ほかの言葉が思いつかなかった。

彼女は不安そうに私を（たぶん）見上げ、訊ねた。

「私のこと、嫌いになった？」

まさか。私はそう答えて、彼女を抱き寄せた。かさかさしたヘタが頬に当たった。

でこぼこの肌、いや皮をさすりながら、私は考えていた。さて、どうやって打ち明けようか。

自分もまた、奇数月の第3木曜日にはラジオペンチに変身してしまう体質であることを。（了）

おじいさんの畑にかぼちゃができた。中に、ひとつだけ、見慣れない橙色のかぼちゃがまぎっていた。

南蛮にはそんな色のかぼちゃがある。

でも、おじいさんは知らなかった。これは、食べられまい、と思って採らずにほうっておいた。

そのまま、そのまま。

かぼちゃは大きくなった。大きく大きく大きくなった。

邪魔だからよけよう、と思っても持ち上がらないくらいになった。

ううむむむむ。

おじいさんは疲れてしまって、かぼちゃの前に座り込んでいた。

すると、みしみしと音がする。

みしみし、ぱりっ。おぎゃあ。

かぼちゃがわれると、中から男の子が出てきた。

おじいさんには、子供がいる。一人目は太郎。この国ではそう名付けることになっている。太郎

は三つの時、高い熱を出して死んだ。

二人目は二郎。太郎とは二つ違いだ。この子は病気をすることなく育て、今では当主となっている。

かぼちゃから出てきた子は、だから、三人目になる。三人目は三郎。この国ではそう名付けること

になっている。

けれど。

「太郎。」おじいさんは、目の前の男の子にそう声をかけていた。

「はい、ちちうえ」と、太郎は言った。

太郎のままでは二郎に悪いからと、おじいさんは、かぼちゃの太郎を太郎三郎ということにした

。

かぼちゃの太郎三郎は、大きくなった。大きく大きく大きくなった。

一年のうちに七五三を済ませ、次の一年で元服を済ませ、三年目に嫁を取った。

おじいさんは、太郎に、七五三をしてやりたかった、元服をしてやりたかった、嫁を取らせたか

った。

それが、一気になかったようだった。

ああ、もうこれで、大丈夫。あとは太郎に墓を守ってもらったら。

畑から戻らないおじいさんを心配して、二郎が様子を見にいくと、大きな橙色のかぼちゃの前で、おじいさんはなくなっていた。

橙色のかぼちゃは割れて、種がこぼれていた。

二郎は、兄の太郎が眠るお墓に、おじいさんを葬り、そして、かぼちゃの種を埋めてやった。

かぼちゃの蔓がお墓を覆っても、そのまま、そのまま。

毎年一つだけできる橙色のかぼちゃをたのしみに、二郎は百まで生きたという。（了）

あんまりはりきりすぎて、作るのが早すぎちゃった。

初めて作ったパンプキンヘッドを、毎晩眠る前、カーテンの隙間からちらりとのぞく。

少しレンガを積んで、その上にカボチャをのつけた。作ったときは誇らしかった。初めてで、カボチャは少しいびつだったけど、そしてぼくの切り方もあんまりうまくなくて、顔はよく言えば個性的、わるく言えば妙にゆがんだ笑顔になった。

それでもなんとかしあがったカボチャ大王、ぼくはちょっと自慢に思っていたのだけれど。

ほんとははりきりすぎた。早くにがんばりすぎた。

窓からのぞく大王は、日々、少しずつ形が崩れていってる。シャープだったかおだちが、なんだかどろんと崩れてきてる。

ほんというと、もう早く捨ててしまいたい。

ハロウィンが終わるのを、心待ちにしてる。

お菓子もらわなくてもいいから、あのカボチャ大王を、どこかにぶつけて壊してしまいたい。

なんだか毎日、大王ににらまれている気がするんだ。

ほんというと、ぼくは大王が、日々怖くなってきてる。終わっても、自分でかたづけられないかもしれない。

こぼれた種で、あそこに芽が出てカボチャが生えてきたらどうしよう。

目も鼻もあるにったり笑ってるカボチャが。

ぼくはもう、一生カボチャは見たくない。

(了)

バス停のベンチに女の人が座っていた。何台もバスがやってきたが、その人は座ったままだった。ボクは気づいた。彼女は泣いている。とたんにボクは彼女を助けてあげなければと思った。今彼女の悲しみを知っているのは、世界中でボク一人だけ。今彼女が必要なものを与えられるのは、世界中でボク一人だけ。そして、今のボクならそれができる。

大人のくせに街中で泣くなんて思わなかった。涙がぼろぼろこぼれて止められない。泣き声を漏らさないように口を閉じているのに精一杯で、立ち上がって歩くことさえできない。ただ誰にも気づかれないように下を向いて、鞆と手に落ちる涙をびしょびしょのハンカチで拭い続けていた。

ふいに足元に影が落ち、頭の上でくぐもった声があった。「これ、よかったら使ってください。」鞆の上にポケットティッシュが差し出された。礼も言わず受け取ると「置いておきますから」鞆の横にティッシュがいくつか積まれた。私は俯いたまま頷いて、ティッシュの山を自分の方に引き寄せた。

何台もバスがやってきて去っていった。人の列が伸びては縮み、やがて終バスが闇に消えると、バス停には私一人が取り残された。前髪に手をやるふりで顔を隠しながら、立ち上がって振り返ると、人気の絶えた駅前通りでティッシュを配る青年がいた。

彼は遠慮がちに彼女に近寄った。そして「歩くのに、泣き顔が恥ずかしかったら...もし、よかったら、これ使ってください。」と言うと、頭の大きなカボチャのかぶりものを脱いだ。その後のことは知らない
(了)

わが家が南瓜の大群に襲撃されてから、5日が過ぎた。

秋の午後、飼い犬の烈しい鳴き声からそれは始まった。庭へ様子を見にいくと、あの忌まわしい緑黄色野菜どもが、蔓を鞭のごとく振るい、種を弾丸のように飛ばして、犬に襲い掛かっていたのだ。私は妻を呼び、家じゅうの窓とドアを封鎖した。犬も中へ入れようとしたが、連中の侵入を防ぐのがやっとなで、とても無理だった。私と妻は奇蹟的にかすり傷程度で済んだが、犠牲は大きかった。愛犬と、武器に用いた数本のゴルフクラブである。

というわけで、我々は籠城しながら助けを待っている。食料にはまだ余裕があるが、電話線が切断され、外界との連絡は絶たれている。雨戸を閉め切ったせいで、家の中は昼間でも真っ暗だった。

閉鎖空間での生活は、急激に我々の精神を蝕んでいった。あるとき、キッチンから妙な音がするので見にいくと、妻がダーツよろしくキッチンの壁に包丁を投げつけていた。べつの日には私が「グリーングリーン」を歌いながら全裸でリビングを駆け回ったが、これはストレスのせいではなく、前から一度やってみただけである。

そして、恐れていたことが起こる。思いつめた妻が「自決しましょう」と言い出したのだ。

「あんな化け物にやられるくらいなら、いっそのこと...」

「自棄を起こすんじゃない。それこそ南瓜どもの思う壺だ」

今にもラジオペンチを自らの喉に突き立てようとする彼女を、私は懸命に説得した。

そのときである。玄関から轟音が響いた。私は瞬時に理解した、バリケードが突破されたのだ。奴らはまっしぐらに、我々のいるリビングへなだれ込んできた。ウリ科の侵入者たちはどんどん数を増し、じりじりと近づいてくる。

くの字に曲がったゴルフクラブを振りかざし、私は叫んだ。

「さあ来い、このカロテン野郎。相手になってやる」

突然視界が真っ白になり、眩暈がした。そして強烈な眠気が襲ってきた。催眠ガスだ。こんなものまで用意していたのか。

薄れゆく意識の中、私の目は物陰から現れた人影を捉えていた。長髪の中年男だった。奴らの手先か、それとも彼が全ての黒幕だろうか。頭には大きな南瓜をのせて...いや、あれはヘルメットか？

赤いヘルメット。そして、手には大きな...プラカード...

(了)

わー きゃー

「やれ！カボチャ兵ども！」

「カボー！」「チャー！」

大人の人間ほどの大きさはあろうかという大きいカボチャを頭にかぶったような怪人が、通常サイズのカボチャをかぶった人？に命じて人々を襲わせている。

「そこまでだ！」

そこに現れたのはカボチャ風の覆面をつけたヒーロー。我らがカボチャ仮面。

「何を企んでいる、カボチャ大王！」

「カッカッカカボカボカボ（笑い声）。知れた事を。全人類をパンプキンヘッドにしてやるのよ！」

「何！それは……いいな！」

「ならば」「おう！」

「「必殺！ダブルパンプキンビーム！」」

ぼんっと音を立ててビームを浴びた人間がパンプキンヘッドに。

『カボチャ大王 vs カボチャ仮面』2011年冬公開

「そんなばかばかしい映画の宣伝されてもねえ。でもちょっと観たいかも」

コンコン

「トリックオアトリート！」

「はーい、今開けるわね……ってカボチャ！？」

「パンプキンビーム！」

「カボー！」

「ハロウィン。今宵は我らがうろついても怪しまれぬ！

新たな仲間カボチャレディよ、さらに仲間を増やすために行くぞ！」

「チャー！」

（了）

学校帰り、寒くて風が強かったので、少し遠回りをしてアーケードのある商店街の中を通ることにした。あまり通らない商店街の中を見るときもなしに見ながら歩く。吹きさらしの外からアーケードの中に入ったので、わたしは肩の力を抜いて、肩の端まで移動していた鞆の肩紐を首の手前にまでかけ直した。

ケーキ屋さんの前を通るとき、ウィンドウのところに橙色の塊がいるのが見えた。ぬいぐるみのようなクッションのようなそれは、カボチャの形をしていた。ハロウィンか、と思う。でもあのカボチャの呼び名ってなんだっけ。知っているはずだけれど思い出せない。

考えながら通り過ぎ、また歩いて、揚げ物屋さんの前で立ち止まった。地元ではわりと有名な店だ。情報誌に載ったこともある。休日に行列ができることもあるけれど、今は平日の午後四時前なので誰も並んでいない。ちょうど揚げたてのコロツケが並べられていくところだった。

ビーフコロツケは一個五十円。揚げ物屋さんの隣が閉まっていたので、その前で立ったままかじる。かじったところから湯気が立った。熱いので口の中で転がす。有名な店だから、とかはたぶん関係なく、揚げたてのコロツケは常に美味しいものだ。

多少人目を気にしながら火傷しないようにコロツケを減らしていると、「ビーフコロツケ一つ」という声が隣から聞こえた。やわらかな感じの女性の声、見るとカーディガンとロングスカートの人がコロツケの袋を受け取っていた。今日の寒さだとそのカーディガン姿は少し肌寒そうだった。

カーディガンの人はわたしの前を通り過ぎかけて立ち止まり、「ああ」と声を上げた。知り合いのような反応だった。知り合いだろうか。知り合いのような気がする。見た目は二十五から三十くらい。見つめ合ううちに友達の姉だったような気がしてきた。彼女はわたしのコロツケを見て共犯者の笑みを浮かべる。わたしはとりあえず会釈をした。

わたしがこのあとどうしようかと思っていると、彼女はスカートのポケットに手を突っ込んで何かを取り出した。

「これあげる」

そう言って差し出す。わたしは小首を傾げながらも手を伸ばした。ぽとんと手の上に落ちる。パッケージされたキーホルダーだった。橙色のカボチャ。ハロウィン的な顔が描いてある。

「じゃあね」

「あ、はい」

反射的にそう応えると、彼女はひらひらと手を振り去っていった。紙袋を開けながらだったので、コロツケは歩きながら食べるのだろう。

わたしはコロツケをお腹の中に片づけてから、キーホルダーのパッケージを剥がし、鞆につけた。このかぼちゃの呼び名も、さっきの女の人のこともわからない。だけれど鞆につけていたらそのうち思い出すかもしれない。思い出したところで、たぶん特に意味はないのだろうけど。
(了)

私は都内女子高に通う17歳。今日は日曜だけど朝から夕方までバイトなのだ。

食卓には朝食が用意されていた。食卓といってもLDKの一角で、玄関も丸見えなんだけどね。

「おはよう」

白髪交じりの頭に、これでもかというくらいの寝癖をつけたオヤジが言った。私はそれには答えず

ホットミルクに口をつけた。在宅の仕事だからって、もう少し身だしなみに気を配ってほしいものだ。

「そういえば今日、ハロウィンだね」

サラダのミニトマトを見て思い出したことを口にした。友達ハロウィン、ハロウィンと騒ぐけど、

私はあんまり興味ないんだ。

「ああ、シンデレラの日ね」

「ちげえよ」

「じゃあ、夏目漱石の日だ。か坊ちゃん...なんちゃってー」

朝っぱらからオヤジギャグなんて聞きたくないというようにそっぽを向く。

「ごめんごめんご」

「それよりハロウィンなんだからさー、夜おいしいものでも食べようよ」

ハロウィンにかこつけて旨い物に在り付こうという腹だ。

「俺が若い頃はだなあ、ハロウィンなんて何もしなかったものだ」

「もういい。言った私が馬鹿だった」

怒ったように立ち上がり、洗面所へと向かった。

玄関で買ったばかりのブーツに足を通してしていると、オヤジが背後に近寄ってきた。

「忘れ物はないか？」

「大丈夫」

「それじゃあ、お別れのチュウをしよう」

「きもいんだよ、ば〜か！」

捨て台詞を残して家を出る。

「行ってらっしゃい」

後ろでつぶやくような声が聞こえて頬が緩んだ。

バイトが終わると辺りは暗くなっていた。マンションの前まで来ると部屋に明かりが灯っていないことに気づいた。

「出かけちゃったのかなあ」

チャイムを鳴らしてみたが出てくる気配はない。滅多に外出しない人だから不思議に思いながら自分で鍵を開け中に入った。

手探りでスイッチをつけると同時にクラッカーが鳴り、思わず顔を伏せた。

恐る恐る顔を上げると、部屋には幼稚園児が作ったようなハロウィンの飾り付けがしてあり、食卓には私の大好きな鶏のから揚げが山盛りになっていた。

「ハッピー！ハロウィーン」

私は声の主を駆け寄り、飛び付いた。

「ありがとう、ダーリン！」

白髪交じりの頭はきれいに整えられていた。

私たち夫婦のハロウィン・ナイトはこうして始まったのだった。

(了)

Haiku or Tweet?——めりりん

ノックに応じて玄関のドアを開けると、犬を連れた少年が立っていた。

「ハイク・オア・ツイート？」と少年は言った。

「つうかなんだ、ハイクって？」

「ハイクはキーワードに沿って気軽に更新できるミニブログ、ツイートはいまどうしてる？で繋がるコミュニケーションだよ」

「どう違うんだい？」

「そりゃあ、コンテキストが違うのさ」少年はそんなことも分からないのかといった口調で言った。「ハイク・オア・ツイート？さあどっち？」

ツイート、とつい言いかけたが考え直して言った。「ハイク！」

すると次の瞬間、あたり一面に降り注ぐスター、スター、スター！ちくちくするがなんだか心地よい。

「ああ、ストレス解消になった」と少年も満足そうだ。

「楽しかったよ、また来年も来いよ」とわたしは言った。

すると少年は一瞬困ったような、寂しそうな顔をしたが、すぐにもとの表情に戻って言った。「うん、きっとね」

さて、あなたならどちらを選ぶだろうか。

Haiku or Tweet?

(了)

ハロウィンの夜。通りは仮装した人々でいっぱい。ドラッグストアの店内ではワインもふるまわれ、ダウンタウンは夢心地。不信心な熱気に包まれ、お巡りさんの持ったピストルだけがリアルな光を放っておりまして。そんな喧噪から、ひとつの影が離れていきました。彼はスパイダーマン—のコスチュームを着た変な人でした。スパイダーマンは駆け抜けます。サッ、サッ、サッ。なんて軽い足どり。この日のためにビリーズブートキャンプにも耐えたスパイダーマンなのでした。町はずれ。見上げたのは古びた二階家でした。月に照らされた庭は少し荒れています。スパイダーマンはこの家に住む未亡人に今夜こそプロポーズをして、長すぎた春を終わらせる決心をしてきたのでした。彼的には凄い勇気です。でもあまりシリアスになるもの考えものだぞ。跪きリングを贈るなら、できるだけ何気なく自然にだ。そのためにこそ、このスパイダーマンの姿は役に立つ！—となぜだか彼は考えていたのでした。

スパイダーマンは意を決し、チャイムを鳴らしました。玄関にはカボチャのランタンが五つ、ぼんやりと灯っておりまして。ランタンからのびた電気のコードが、ドアのすき間を通り家の中へと続いています。スパイダーマンはもう一度チャイムを鳴らしました。でも返事はありません。ドアを開き体を半分だけ入れてスパイダーマンは呼びかけました。

「こんばんわー」

ドビュッシーが聞こえてきました。曲名は知らないけどその調べを聞いたたび、変なの、とスパイダーマンは思うのでした。変な気分のまま家に入り、階段を見上げました。誘われるようにして軋む階段にのぼると。バスルームがあって奥が寝室でした。ゴクリ、とスパイダーマンは唾を飲みこみました。凄くヤバイよ、ヤバイよ、と思いつつ、そのドアノブに手をかけました。部屋の中にはベットがあって、脱ぎ捨てられたドレスがありました。その横にはキャットウーマンが立っていて、引き出しからあわてて取り出したらしい32口径がこちらに向けられておりまして。スパイダーマンは叫びました。

「アイム、スパイダーマン。キャットウーマン。いやリリィさん、指輪を届けにきました。ぼくは今夜。ハロウィンです！」

幸いにも銃口が火を吹くことはありませんでした。駆け足で話の顛末を語れば。リリィさんの部屋のクローゼットにはバットマンの衣装が下がって、スパイダーマンはそれに着替えたのでした。彼らの娘がキャットウーマンとバットマンのキスするシーンを目撃し、トラウマにしちゃうのは10年後のことになります。（了）